

ことばの教室における子どものリテラシーを高めるコミュニケーションアプローチについての一考察

松村 勘由（国立特殊教育総合研究所） 牛久保 京子（幸手市立幸手小学校）

1. ことばの教室における子どものリテラシーを高めるコミュニケーションアプローチ

ことばの教室に通級する子どもの中に、ことばの発達の遅れを主訴とする子ども達がいる。こうした子ども達への指導は、言語が育つための環境要因に働きかける間接的な支援に加えて、ことばの教室での直接的な指導が行われることが多い。

就学指導資料（平成14年6月 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課）では、「言語機能の基礎的事項の発達の遅れや偏りに関する障害」として、次のような指導内容を例示している。

a コミュニケーション態度の育成やコミュニケーション意欲の向上を必要とする児童生徒への指導

言語機能の基礎的事項を学習するためには、他者と一緒にいたり、他者とやりとりをしたりすることを喜ぶような態度を育てることが必要である。したがって、温かな人間関係を形成し、児童生徒の興味・関心に即した物などを教師が提示することによって、話題を共有したり、言語的なやりとりを活発にしたりするよう配慮して指導する。

b 言語活動の楽しさを学ぶ必要がある児童生徒への指導

児童生徒の中には、語彙がある程度豊かであり、また基礎的な文法を知っているが、実際の生活の中でそれらを使用することができにくい者がいる。

このような児童生徒には、文字や言葉を使用することの楽しさや便利さを教えることが必要である。例えば、文字に関しては、その言語発達を促進するため、「お手紙ごっこ」や「文通」などの方法を活用することができる。また、「買物ごっこ」をしたり、ワードプロセッサを使用したりなどして、文字を使用することの楽しさや便利さを分からせるようにすることもできる。

c 繰り返しにより、認知力の向上を図る必要のある児童生徒への指導

学習場面等において習得したと思われる言語を、実際の生活では十分使用することができにくい児童生徒に対しては、実際の生活でも使用できるようにするための指導を工夫して行う必要がある。つまり、できる限り児童生徒の生活の場から題材を得たり、実際の生活の場につなげるような工夫をしたりなどして指導することにより、他者との間に成立したやりとりや、児童生徒の認知力をより一層向上させるようにすることが大切である。

d 話す、聞く、読む、書くなどの言語スキルの向上を図る必要のある児童生徒に対する指導

自分の気持ちを話し言葉で他者に説明したり、文字で表現したりする能力や、他者の気持ちを文字や話し言葉によって理解したりする能力などが、年齢相応に十分発達していないような児童生徒に対しては、言語機能の基礎的事項についての個別指導が必要である。例えば、言葉と具体物や絵カード、実際の体験などを照合させて、話したり、書いたりする活動を行うことにより、基礎的な言語スキルの向上を図るようにする。

これらの指導内容は、ことばの育ついくつかの要素に分けて整理することができるだろう。

(1) コミュニケーションを豊かにすること

- (2) ことばの使用面での働きかけを行うこと
- (3) 実生活の経験と結びつけて働きかけること
- (4) 話す、聞く、読む、書くなどの具体的な言語活動を視点に働きかけること

こうした指導の実践は、この研究の研究テーマである子どものリテラシーを高めるコミュニケーションアプローチの視点から整理できる。

とりわけ(1) コミュニケーションを豊かにすること(2) ことばの使用面での働きかけを行うことの要素については、これまでの指導の大きな柱でもあり、ここで、あらためて整理を試みたい。

ことばの教室では、子どもと担当教師との共感的な関係の中で、より豊かなコミュニケーションを行う活動が行われている。例えば、日常的な話題での話し合い(おしゃべり)、体験的な活動を通して、また、遊びの中で、話しことばを通じたやり取りをすることも多い。この活動は、子どもと教師のコミュニケーション関係を重視していること、また、ことばの使用の実際を重視していることとして指導の要点として挙げることができる。

こうした活動を積み上げる中で、子どもの周囲他者に対する信頼の気持ちや周囲他者と関わる喜びが培われ、また、具体的な言語活動が活発になり、結果として、子どものことばが育つ契機となっている。

一方、話しことばを通じた指導に加え、書きことばを通じた指導も行われることが少なくない。具体的な例をいくつか提示することにする。

(1) 日記指導を通して

子どもに家庭学習の課題として日記を書かせ、書かれた日記を題材に、担当教師との間で話合ったり、書かれた日記の内容に対して、教師が書かれた内容に対してコメントを書き入れたり、用語や用字の誤りを直したりすることもよく行われる。小学校の低学年では、絵日記を通じた指導が行われたり、高学年では、担当教師との交換日記として行われることもある。

(2) 新聞作りを通して

ことばの教室で学習したことや子ども自身が日常生活で体験したことなどを新聞として記述し、在籍学級の担任やクラスメイトに配付したり、壁新聞として掲示するなどの取り組みも行われている。学年段階や子どもの状況によって、文字だけでなく絵を入れたり、ワープロを活用して文を構成したり、デジカメで写真を入れることも試みられている。こうした活動は、子どもが在籍学級の担任の先生やクラスメイトに、教室での出来事や自分のことを伝えていく活動であり、子どもの側からの他者へのメッセージである。また、こうした活動に対して、在籍学級担任やクラスメイトからの手紙や感想などのフィードバックが得られれば、子どもと周囲他者とのコミュニケーション活動であるといえる。

(3) 教室通信を通して

担当教師が教室での子どもの様子を記述したり、子どもの作文や作品を掲載した教室通信を発行することがある。教室通信の記述を通じた、担当教師からの子どもへの語りかけ、教師の目を通じた子どもの姿が子どもの心に伝わっていく。子ども達は、そこから物事の捉え方や感じ方、表現の仕方を学んでいく。

これらの活動では、読む、書くことを通して、子どもと担当教師及び在籍学級担任やクラスメ

イトとのコミュニケーションが図られている。また、読む、書くなど具体的なことばの使用面での活動が行われて、結果として、子どもの読み書きの力が育つ契機となっている。

以下、具体的な実践事例の概要を挙げる。

2. 実践事例 ―絵日記を通した指導―

この事例は、周囲の人たちが、コミュニケーションが取りにくいと感じた子どもへの6年間（小学校1年～6年）の指導実践である。

【子どもの概要（初回面接時）】

「話をしても、話が噛み合わない」という両親の心配で、ことばの教室に相談に訪れた。ことばについての検査では、サ行、ザ行の音に置換の誤りがある他には、特に問題は見られなかった。しかし、その場になれてくると、初めての場にもかかわらず教室を歩き回り始め、教室の中のいろいろな物に興味をもち、置いてあるケースの引き出しを勝手に開けて中の物を取り出して遊んでしまう。両親の制止も聞かなかった。時折、着席してはいろいろと話しかけてくるのだが、話題がくるくると変わる上、担当者の話を聞こうとしないなどコミュニケーションが成立しにくかった。

【指導の経過】

① 絵日記を開始するまでの経緯（小学校1年～2年の始め）

まずは、誤っている構音の改善指導を行う。単音の指導の段階では落ち着いて練習できたが、単語のレベルになると、気になる単語のところであれこれ思いつく話題で話を始めてしまう。時には、子どもの話に対して質問をすると、話そうとすることが混乱してしまうようで、何を話そうとしたのか分からなくなることが度々あった。

＜見えてきた子どもの姿＞

- ・今、話したことが何だったのかを忘れてしまう。
- ・話そうとする内容がいつのことだったのか混乱する。
- ・話そうとしたことがまとまらず、パニックになる。

＜かかわり方の工夫とめあて＞

- ・話そうとすることを整理する力をつけ、相手を意識して話せるようにさせたい。
- ・より分かりやすく楽しいコミュニケーションをするための内容を整理し、書く力もつけたい。
そこで、その手立てとして日記を活用できないかと考えた。
- ・身の回りで起きた出来事を、起きた時間の順に書く力をつければ、話そうとすることも混乱がなく話せるようになるのではないか。
- ・絵日記にすれば、内容がさらに印象深くなるのではないか。
- ・絵日記は、家庭での課題として提示し、保護者との一緒に取り組むようにさせる。
- ・ことばの教室では、書いてきた絵日記の内容を話題にして話し合うこととした。

② 絵日記指導の開始後の経過と変容

＜絵日記指導を開始したばかりの頃＞（小学2年始め～半ば頃）

- ・日記はまだ一人ではかけない。内容は出来事を列記するのみ。
- ・夏休みには、家族で出かけた時の簡単な気持ちを書けるようになった。

- ・「今日は～」 「ぼくは～」等の書き方のパターンを覚える。
- ・日記を通しての担当者との話し合いの場面では、質問の答えに困ると同席している保護者を頼る傾向があった。気持ちをことばで表現するのは未熟であった。
- ・相手に聞いてもらいたいというような意識が出始めた。

<コミュニケーションを楽しめるようになった頃> (小学2年半ば頃～学年末)

- ・これまであまり注意が向かなかった友達の行動をよく見るようになり、自分で感じたことを書いたり話したりするようになる。同時に出来事に対するいろいろな感想も盛り込めるようになり、コミュニケーションにも感情を表すことばが入るようになった。
- ・保護者のことばで書いているような文から、子どもが感じたままのことばで書いてくるようになってきた。
- ・内容にふくらみができ、簡単な接続詞を使って文をつなげるようになった。
- ・両親が、家族の誕生日や年中行事等を大切にし、体験を共有することで話題も共有できるため、家族間でのコミュニケーションの楽しさを感じているようにみえ始めた。
- ・自分の感情の表現に対する相手の反応を受けて、さらに自分の感情を話したりするなど、心のキャッチボールができるようになる。
- ・両親への不満など、自分の気持ちを素直に表現するようになった。
- ・次第に、担当者を意識したコミュニケーションがとれるようになってきた。
- ・在籍校でも、少しずつ友達とのかかわりが取れるようになってきた。

<絵日記から日記へ記述の形態が変わる頃> (小学3年)

- ・絵が次第に簡略になり、資料を多く活用するようになる。
- ・いろいろな接続詞の使い方を教えると、それを使って文を工夫するようになった。
- ・文の書き直しを嫌がらずにやるようになった。
- ・友達関係に広がりが見え、周囲のクラスメイトも本児との接し方を理解し関わるようになった。

<書き綴ることへの自信が感じられるようになった頃> (小学4年～5年)

- ・自分の力で書き綴ったことを話したりすることに、自信が感じられるようになる。
- ・担当者への気遣いや疑問等も文や話し合いの中で多く視られるようになり、コミュニケーションが弾んできた。
- ・いろいろなことが話せる特定の友達ができるようになり、学校生活でも、帰宅後でもお互い刺激されることが増えてきた。
- ・「ことばの教室」での子どもの指導に同席しなくても、保護者は安心して本児を見守ることができるようになった。

<卒業を迎えて> (小学6年)

- ・日記には、デジカメやパソコンを利用した資料を添付し工夫するようになった。
- ・日記の記述は心情を表現する内容が増え、また、心情を表す顔文字を添えることもあった。
- ・修学旅行先での学校交流会では新しい友達が出来たことを報告、自分なりのコミュニケーションがとれるまでの力がついたようだ。

・卒業の年を迎えて、両親の思いはひとしおのものがあるようだった。家族で挨拶にみえるときには、両親ともほっとしたような様子が感じられた。

この事例は、コミュニケーションの難しさを感じた子どもへの指導を日記を通して行った事例である。

この事例では、文を構成する力や、作文を綴る力を高めることをねらいとするのではなく、子どもが伝え合いたいという気持ちを喚起し、その気持ちを支えながら、日記を通したコミュニケーションを継続した。

コミュニケーションの難しさを、書いて伝える活動を通して、相手に対する意識や気持ちや事柄を伝えるための力を身に付けることができたのだと思う。

3. まとめ

ことばは情報や感情を伝えるツールである。人は、ことばを通して気持ちや情報を伝え合い、また、伝え合うことでことばは育まれていく。

また、ことばの持つ「話しことば」と「書きことば」の両側面が関連し合いながらことばは育っていく。「書きことば」を通してのコミュニケーション活動が、ことば全体の力を高め、より豊かなコミュニケーションを生むことに新たな指導の視点を持つことが必要である。